

西表島船浦マングローブ海域における底生動物に関する調査結果によると次のように報告されている。

船浦マングローブ域は地形的特徴から 1) マングローブ干潟、2) 外干潟、3) 水路の 3 つに地形区分される。マングローブ干潟で特異的に出現したのは、ヒロクチカノコガイ、カワアイガイ、キバウミニナ、シレナジミ、シワツキガイ、マングローブヒメガイ、オカヤドカリ、カノコセビログニ、カクベンケイガニ、ヨコスジオサガニ、カワスナガニの 1 種、オオユビアカベンケイガニ、カクベンケイガニ、フタバカクガニ、ミナミアシハラガニ、ナミハゼ等で、カニ類や巻貝類が多いとしている。マングローブ林内には大型巻貝のキバウミニナが生息し、マングローブの落葉を直接摂餌している。

外干潟とマングローブ干潟との境界付近にはオキナワイシダミ、カンギク、ミツカドカニモリなどが出現している。同船浦干潟及び河川下流域における三枚刺網とカニかご調査結果は次のとおりである。カニ類ではノコギリガザミ、タイワンガザミ、ベニツケガニが漁獲された。魚類では、オキフエダイ、ウシザメ、ミナミクロダイ、ギンガメアジ、コチ、メナタ、ナンヨウチヌホシマクラハゼ、ヒメツバメウオ、ロウニンアジ、アマミウシノシタが漁獲された。水産上の有用種はノコギリガザミ、タイワンガザミ、ミナミクロダイ、ナンヨウチヌ、ギンガメアジ、ロウニンアジの 5 種である。

#### (6) ノコギリガザミの資源生態

ノコギリガザミはワタリガニ科中最大の種で、主に河口域や内湾に分布する。熱帯～亜熱帯に広く分布し、美味で食用となり、東南アジア諸国ではマッドクラブ、マングローブクラブと称し、重要な水産資源となっている。本邦では静岡県浜名湖で多獲される。沖縄県ではノコギリガザミの漁獲量について統計資料が充分とは言えない。漁業者および地域住民から聞き取り調査による推計によると、西表島全域における漁獲量は昭和 53～54 年に約 10 トンを最高に、現在は 3～4 トン程度と思われる。石垣島名蔵河口の漁獲量は不明である。

漁業：西表島、石垣島にノコギリガザミ専業はおらず、その他の漁業に入る。採捕漁具はカニかご、フック (1.5～2.0 m) 刺網である。漁場は西表島の仲間川、浦内川、クイラ川、仲良川等のマングローブ域であり、石垣島では名蔵川、宮良川等の河口域である。とくに石垣島では遊漁者が目立つ。

生活環：本県に採捕されるノコギリガザミは三つのタイプに分かれる。即ちアミメノコギリガザミ ( $max$  2.5 kg)、アカテノコギリガザミ ( $max$  1.5 kg)、ノコギリガザミ ( $max$  1.5 kg) である。そのうち、大型種のアミメノコギリガザミが最も多い。

産卵期は 2～5 月と 9～11 月の二峯型で、春季が主である。雌ガニは産卵時降海することが知られている。産出されたゾエア幼生は、外海で浮遊期を送る。メガロパ、C<sub>1</sub> 期に河口干潟域に接岸来遊する。着底場所は平均海面よりやや下方のレベルにある外干潟のみお筋に着底する。この浮遊期から着底に至る着底機構には不明な点が多い。発育段階に従いその分布をマングローブ域へと拡大する。すなわち稚ガニ、幼ガニ期は比較的移動性がみられる。成ガニは巣穴居住性があり、マーキング調査でも大きな移動はみられない。

アミメノコギリガザミは満 1 年で甲幅 15 cm (体重 700 g) 以上になり成熟する。なお雄ガニの飼育例では満 1 年で 1.2～1.4 kg に成長した。

中間育成は図-3に示す網囲い方式で行なった。場所は干潮時でも冠水する干潟域である。網囲い面積は放流時50尾/㎡をめどとし、名蔵湾600㎡、宮古140㎡である。中間育成期間は30～50日間。餌料は魚肉ミンチ、沖アミ、アサリを1日1回適当量投餌した。本土産ノコギリガザミは前顎突起と鉗脚の腕節の形状によって地元にも産するアミメノコギリガザミと識別可能である。

これにより放流後の追跡調査を試みた。

57年の調査例では、9月14日(放流後1ヶ月半)に放流個体は甲幅3.3～5.4cmに成長し発見個体数から歩留りは約3%であった。また、57年度、58年度の放流個体は3～4の春季に体重300gに成長していることが確認された。

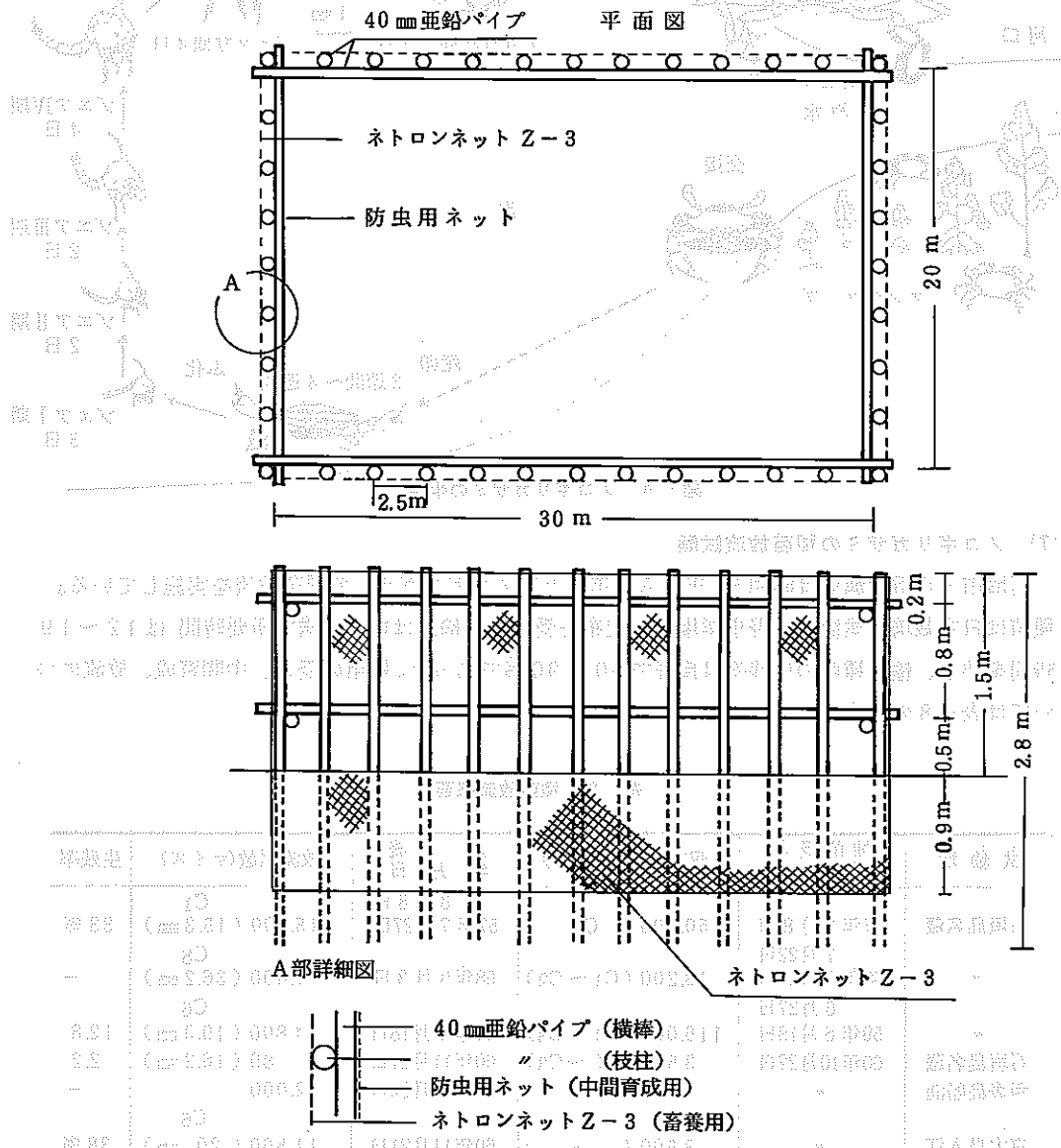


図-3 ノコギリガザミ中間育成池